メタ的に産出したノダ文の文法的特徴に関する一考察
−中国人学習者と韓国人学習者との比較−

名嶋義直
東北大学大学院文学研究科

1.　研究の背景と調査概要

1.1　研究の背景

現代日本語のノダ文については多くの先行研究がある。ノダをいかに教えるかという課題についてもさまざまな提言や取り組みが行われている。しかし未だ誤用や非用が多い。なぜ誤用や非用が減少しないのであろうか。従来の誤用分析に留まるのではなく，学習者がノダ文をどのように理解しているのか，言い換えれば，学習者の持つ心的文法を明らかにすることができれば，学習者の誤用を予防する有益な知見が得られるのではないだろうか。そこで学習者におけるノダ文の理解の実態を明らかにするために調査と考察を行うこととした。

1.2　調査概要

外国語として日本語を学ぶ大学生に対し質問紙調査を行った。質問紙は発表者が作成し，日本に留学中の日本語教育学を専門とする中国人・韓国人大学院生に翻訳を依頼した。質問紙には頭に思い浮かぶノダ文の「例文」を思いつくまま思いつくだけ思いつく順序で記入すること，その例文を使う「文脈」とその例文の「用法」についても記入することを求めた。「例文」は日本語で記載し，「文脈」と「用法」については母語で記載しても日本語で記載してもよいこととした。

中国 A 大学での調査は 2012 年３月 19 日と 20 日に行った。調査協力者は 36 名で，日本語能力を自己申告してもらったところ，上級２，中級（上）12，中級（中）18，中級（下）４であった。合計で 110 の例文が集まった。韓国での調査は，2012 年３月 16 日と 20 日に A 大学と B 大学で行った。調査協力者は 59 名で，日本語能力を自己申告してもらったところ，超上級１，上級８，中級（上）16，中級（中）14，中級（下）12，初級７，未記入１であった。例文の総数は 162 であった。３番目までの例文が全体に占める割合を見ると，中国人学習者では 86.3%，韓国人学習者では 83.3%であった。そこで本研究では３番目までの例文について考察を行った。

1.3　本発表の概要

発表者はこれまでに学習者がメタ認知しているノダ文について，「説明・主張」用法が多いこと，「文脈」への意識が弱いこと，「文脈」への言及が弱い例文は「誤用」も多いことなどを指摘している（名嶋(2012a)，名嶋（2012b)，名嶋（2013)）。その研究の過程で例文そのものに興味

深い文法的な特徴が散見されることを見出した。本発表ではその点について比較考察を行った結果を述べる。それは産出された例文から「先行文脈の存在」・「先行文脈との関連」・「思考の書き換え」というノダの使用条件を学習者がどの程度満たしているのかについて考えることでもある。

2.　「～は～のだ」

2.1　中国人学習者の例文に見られる「～は～のだ」

「～は～のだ」という構文とその周辺的な例文を取り上げる。ここで取り上げる「～は～のだ」とは単に主題が提示されているノダ文のことではなく，次の例のように，「～は」があくまで「構文の外見的な完成度を高める」という要請からのみ使用されていると考えられる例である。

（1）いつも君のそばにいたい。これは君が好きなんだ。

（2）これは彼のせいで失敗したのだ。

これらの例文では「これ」・「それ」といった指示詞が「は」で提示されている例が多かった。発話された時にその指示詞が差し示すものが同定できない場合，違和感を与えるものとなる。

この周辺に位置づけられる例文として分裂文がある。

（3）行かなかったのは用事があったのだ。

この例文は誤用ではないが，分裂文は主題化されている部分が前提となっているものなので，先例と同じく「構文の外見的な完成度と高める」という要請から使用されていると言うことも可能であるし，使用される状況によっては冗長な印象を受け手に与えかねないという問題もある。

送り手・受け手に前提とされていることが構文上に言語化されている例文は他にもあった。

（4）失敗した原因はやり方が間違っていたのです。

（5）どうして留学したいかというと，外国語をよく勉強したいのだ。

（1）から（5）に共通する特徴は，ノダが解釈の対象としている先行文脈を構文的にも何らかの方法で顕在化しようという姿勢である。このことは，学習者がノダ文を，構文的特徴に着目した上で，分析的に教えられたり理解していたりすることを示唆する。これらの例文ではノダがカラとほぼ同義で使われているように見受けられる点にも注意を払っておく必要があるだろう。

2.2.　韓国人学習者の例文に見られる「～は～のだ」

韓国人学習者の産出した例文においても「～は」を伴うノダ文は多数観察されたが，それは「構文の外見的な完成度を高める」という要請からではなく「構文の主題を提示する」ために用いられているものであり，「構文の意味的な完成度を高める」という要請に基づいているものであった。2.1 節で挙げたような，中国人日本語学習者の産出した例文に複数見られた，「構文の外見的な完成度を高める」ために「～は」を伴っていると考えられるノダ文は観察されなかった。

分裂文も観察されなかったが，分裂文の主題となりうる内容が例文内には顕在化されずに「文

脈」として記述されている例がいくつか観察された。[　] 内が回答に書かれた「文脈」である。

（6）[日本に行った理由を説明するとき] 留学に日本へ行ったんです

（7）cf. なぜ日本に行ったかというと，留学したのです。

（8）[誰がしたのか説明するとき] 母が作ったのです。

（9）cf. 誰がしたのかというと，母が作ったのです。

韓国人学習者は，「前提」を必要に応じて顕在化することもあれば，顕在化せずに先行文脈として位置づけることもあり，中国人学習者に比べると，「前提」を構文的に顕在化させようという意識が相対的に弱いと推察できる。心的文法の違いが例文に反映されているように思われる。

3. 思考の改変

3.1. 中国人学習者の例文に見られる「強制的な思考の書き換え」

ノダの使用条件として「強制的な思考の書き換え」を意図するというものが挙げられる。「書き換え」が妥当な行動であるかどうかは先行文脈・発話状況などとの関連によって決まるものであり，総合的に分析しなければならないものであるが，例文の持つ構文的特徴からその条件を満たしていると判断できるものもいくつか観察された。例えば，以下のような否定のノダ文である。

(10) ももこちゃんは社会人じゃなくて学生なんだ。

(11) それは問題ではないんだ。

(12) 私の考えは間違いないんです。

これらは従属節や主題において，「ももこちゃんは社会人だ」や「それは問題だ」のような否定の対象となる命題の存在が前提とされているので，それを主節・述部で否定することにより，必然的に「思考の書き換え」が生じる。特徴的なのは，その前提の存在を構文的に顕在化させているという点である。これは上で述べた「前提」を顕在化させている例文と相通じる特徴である。

これに関連して，「やはり」・「だって」・「きっと」などの副詞を伴っているノダ文の存在を指摘しておきたい。これらも意味的に，既にある想定を「強化」したり「打ち消し」たり「新しく加える」などの「思考の書き換え」操作の存在を前提とするため非文にはなりにくいものである。

(13) やっぱりこれでよかったのだ

(14) だって行きたいんだ

(15) 彼はずっと俺の悪口を言っている。彼はきっと俺のことが嫌いなのだ

3.2. 韓国人学習者の例文に見られる「思考の改変」

韓国人学習者が産出した例文の中にも否定による「思考の書き換え」の例があった。一方で，「思考の書き換え」の実行を前提とするような特徴的な副詞を用いたものはほとんどなかった。

(16) そんなことじゃないんだ。

（17）あの行動はただしくないのだ

（18）実は親友とけんかしたんです

韓国人学習者の産出した例文には「外からの刺激をもとに思考を展開し，自らの認識を新たにしたり書き換えたりする」時に発せられるノダ文が数多く観察された。この種のノダ文は中国人学習者の回答の中にはほとんど見られなかったが，これらはノダが持つ「先行文脈の存在」・「先行文脈との関連」・「思考の書き換え」という使用条件を満たしている最も根源的なノダ文である。

（19）へえ、そうするんだ

（20）今、何、してるんですか！

（21）なぜそんなに急ぐのだ。

4. 開示性

「話題」と「状況」とを精査し開示性を担保しているかどうかについて考察を行った。その結果，全体に占める割合で見ると，韓国人学習者の例文の方が中国人学習者の例文に比べ，開示性を担保していると思われるものが多かった。［　］内が回答に書かれた「文脈」である。

（22）［告白するとき］好きなのだ。（中国：開示性あり）

（23）［漢字の読み方を教えてあげるとき］これはあたまと読むのです。（韓国：開示性あり）

しかし，先行文脈と関連のある新情報を開示できる状況ならどのような話題でも開示性があるというわけではない。重要なのは総合的に見て「思考の書き換え」が許されるか否かである。

（24）［紹介・説明する時］上海は中国のある都市であるのだ。（中国：開示性なし）

（25）［目上の人に過去の行動を説明］リンゴを食べたんです。（韓国：開示性なし）

5. まとめ

大まかな傾向として，中国人学習者はノダ文を単独で分析的に捉えているのに対し，韓国人学習者はノダ文に話題・状況・文脈・認知との関連を加味して融合的に捉えているように思われる。

付記：科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）課題番号 23652110 による研究成果の一部である。

参考文献

名嶋義直（2012a）「日本語学習者が持つノダ文のプロトタイプ的用法について」，『日本語文法学会 第 13 回大会発表予稿集』，2012. 10. 28（於　名古屋大学），pp. 139-146.

名嶋義直（2012b）「ノダ文に関する語用論的考察―韓国人日本語学習者の場合―」，第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム，2012. 11. 24（於　香港城市大学），口頭発表資料.

名嶋義直（2013）「ノダ文に関する心的文法について―中国人学習者の場合―」，『2012 年度第 4 回沖縄県日本語教育研究会予稿集』，2013. 3. 1（於　琉球大学），pp. 59-61.